

鈴木 喜代春（すずき・きよはる）

1、プロフィール

生活綴方運動実践時に直面した、貧しい農村へのはげしいおもいが、以後農村に住み生きるたくましい人間像を掘り起こし、子供らへ生の指針を与えている作家である。

<生没>

1925(大正 14)年7月9日 ~ 2016(平成 28)年5月 13 日

<代表作>

児童文学作品集『北風の子』『白い河』『二つの川』『十三湖のばば』『飢餓の大地』『津軽の山歌物語』『けがつの子』

<青森との関わり>

南津軽郡田舎館村で生まれる。青森師範学校卒業。黒石小学校在職中、生活記録文集『みつばちの子』を発行する。

2、作家解説

大正 14 年7月9日、青森県南津軽郡田舎館村に生まれる。昭和 20 年、青森師範学校卒業後、黒石市内で教鞭をとる。黒石小学校在職中、生活綴方運動を実践、昭和 27 年小学校4年生の生活記録をまとめた文集『みつばちの子』を刊行する。昭和 29 年、転居して千葉県内の小・中学校に勤務。松戸小学校校長で退職。在職中より児童文学作品を執筆、昭和 63 年『津軽の山歌物語』で第 12 回日本児童文芸家協会賞を受賞。日本児童文学者協会会員、日本子どもの本研究会会長、青森県児童文学研究会名誉会員を歴任。

著書の『北風の子』は、黒石小在勤中、社会科で学習した水田単作地帯の子どもたちに、厳しい現実にはげしく生きて欲しいと念願し、学級文集に連載した作品である。ほかに大正末期から第二次大戦の敗戦までの 20 数年の激動の歴史を青森県の貧農の子どもを中心に書いた大作『白い河』や、足尾銅

山の鉱毒事件で戦った農民作次郎の一生を描いた『二つの川』や腰までぬかる“腰切田”で生きる一老婆の生きざまを描いた『十三湖のばば』や三本木平の開墾を描いた『飢餓の大地』等々、いずれも大地に生き、物をはぐくみ育てる真摯な農民を書いた作品が多い。

鈴木喜代春は以前、ある講演会で「私のはぐくまれたのは社会科によってであり、以後私の書くものは常に社会科的視野、思考の中でなされている」と言ったことがあった。これは、黒石小教員時代、生徒と共に津軽の貧しい農村の現状を社会科の中で考え、解決しようとしたが「水田単作地帯の“冬の生活はほんとうに苦しい”という貧しい生活を科学的に把握させても、子どもの顔はあかるくならなかった」（『北風の子』のあとがきより）ということと関連しているようだ。以後鈴木は社会現象を社会科的にとらえ分析し創作してゆく。ただ、これらの問題を政治的に解決しようとする方向ではなく、“厳しい現実の中に、しかし、たくましく育てほしい”という心情的な教育者の悲願として作品に提示されているようである。

3、資料紹介

○『十三湖のばば』

図書

1974(昭和 49)年6月

220mm×175mm

十三湖の南岸にある西郡車力村は「芦野池沼群県立公園」と指定されるほどの湿地帯である。この地にむかし、腰までぬかる“腰切田”のあった話を聞き、現地に取材しこの作品が書かれた。全国学校図書館の“課題図書”となり、多くの少年少女に読まれた。